10/4/2017

日本・アジアのキリスト教――無教会キリスト教の系譜（8）

芦名定道

日本・アジアのキリスト教の歴史を振り返りつつ、その新しい思想的可能性を探ることは、日本におけるキリスト教思想研究にとって重要な意味を有している。この演習では、年度や学期を超えて、無教会キリスト教の思想家たちを順次検討してゆくことによって、近代キリスト教思想の重要な局面の解明がめざされている。今年度前期は、昨年に引き続き、無教会キリスト教における内村鑑三の後継者の一人である、南原繁のテキストを読み進める。

＜演習のスケジュールと場所＞

演習日（後期・水３）：10/4, 11, 18, 25, 11/1, 8, 15, 22, 29, 12/6, 13, 20, 27, 1/11, 18
場所：キリスト教学研究室

・初回の授業では、本演習のオリエンテーションを行い、演習の目的や進め方を確認する。二回目以降は、内村鑑三『社会の変革』（選集６、岩波書店）に収録の諸論考を、担当者の解説を通して、順番に精読してゆく。
・10/4：オリエンテーション＋導入（本日）
・10/11：内村研究から＋担当者確定（テキストの配布）
・10/18, 25, 11/1, 8, 15, 22, 29,12/6, 13, 20, 27, 1/11, 18：演習
・毎回担当者が、テキストの内容を説明し、問題提起し（テキスト外の資料などを合わせて用いる）、議論を行う。担当者はレジメを用意する。残った問題は宿題とする（次回の冒頭で報告する）。
・必要な解説を行う（芦名）。
・成績はゼミでの発表（少なくとも一回）によって評価する。

＜テキスト＞

・内村鑑三『社会の変革』（選集６、岩波書店）

＜内村鑑三の略歴的説明＞　（『岩波キリスト教辞典』の項目・鈴木範久など）

・1861-1930。江戸で生まれる。高崎で幼年時代。
・教育者、ジャーナリスト、無教会キリスト者。
・東京外国語学校から、札幌農学校。
・「イエスを信ずる者の契約」に署名。Ｍ・Ｃ・ハリスから受洗。
・85 年、アマースト大学に入学、シーリー総長の感化（回心を経験）
・91 年、不敬事件。
・『万朝報』英文欄記者、『東京独立雑誌』主筆、『聖書之研究』（1900年-）。
・無教会主義の提唱。
・足尾鉱毒事件反対運動。近代文明批判。
・非戦論。
・再臨運動。
・「２つのＪ」、「日本的キリスト教」。

＜演習の背景・経緯＞

・日本・アジアのキリスト教研究に向けて
　①東北アジア（朝鮮半島・日本・中国・台湾）のキリスト教
　②宣教師サイドからの視点との統合

③アジアにおける新しいキリスト教形成の可能性
④アジアの固有の課題とキリスト教（アジアの近代史のコンテキストにおいて）
⑤フィールド・ワークにおける研究方法の確立
⑥共同研究の実施

・日本キリスト教思想研究：近代日本とキリスト教思想との相互連関を中心に
１．2001 年度の矢内原忠雄、2002 年度の内村鑑三に続いて
２．近代日本（天皇制・民族主義）とキリスト教
３．明治期の日本キリスト教における神学の受容と形成
新神学論争、植村・海老名論争
４．2005 年度から、植村正久と日本のキリスト教的宗教哲学（学問的キリスト教思想）の系譜
とくに、2006, 2007 年度は、植村正久とその思想的展開（高倉徳太郎）
５．2008 年度から 2012 年度まで、波多野精一。
６．2013 年度から、無教会キリスト教。矢内原忠雄、南原繁、内村鑑三。

・研究会との相互関係：研究拠点の形成に向けて
「アジア・キリスト教・多元性」研究会
https://sites.google.com/site/asiachristianity/
『アジア・キリスト教・多元性』創刊号～第 15 号。
『比較宗教学への招待－東アジアの視点から－』晃洋書房　2006 年

＜日本キリスト教史の現状＞
①通史の試み
②個別教派・教団・教会の歴史編纂
③宣教師の伝記・書簡・公式の報告書
④人物研究（内村、新島、海老名、新渡戸、植村など）
⑤新聞・機関誌などの基礎資料の整備
全体的に、日本キリスト教思想研究が、各地の研究グループレベルの議論を超えた、キリスト教研究としてまだ確立していない。
土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史論』（教文館）

＜文献＞
より包括的な文献表としては、http://tillich.web.fc2.com/sub9.htm、http://tillich.web.fc2.com/sub9a1.htm を参照。

Barrett, Kurian, Johnson（eds.）, *World Christian Encyclopedia*. vol.1-2, second edition
Oxford University Press 2001
Scott W.Sunquist（ed.）, *A Dictionary of Asian Christianity*, Eerdmans Publishing 2001

国際基督教大学・アジア文化研究所編　『アジアにおけるキリスト教比較表』（創文社）
日本基督教団出版局編　『アジア・キリスト教の歴史』（日本基督教団出版局）
富坂キリスト教センター　『鼓動する東アジアのキリスト教』（新教出版社）
鵜沼裕子　『史料による日本キリスト教史』（聖学院大学出版会）
隅谷三喜男　『日本プロテスタント史論』（新教出版社）
『近代日本の形成とキリスト教』（新教出版社）
出口光朔　『近代日本キリスト教の光と影』（教文館）
土肥昭夫　『日本プロテスタント・キリスト教史』（新教出版社）

『歴史の証言　日本プロテスタント・キリスト教史より』（教文館）
海老沢有道・大内三郎 『日本キリスト教史』（日本基督教団出版局）
中央大学人文科学研究所 『近代日本の形成と宗教問題』（中央大学出版部）
高橋昌郎 『明治のキリスト教』（吉川弘文館）
古屋安雄・大木英夫 『日本の神学』（ヨルダン社）
武田清子 『土着と背教 伝統的エトスとプロテスタント』（新教出版社）
古屋安雄他 『日本神学史』（ヨルダン社）
石田慶和 『日本の宗教哲学』（創文社）
マーク・R・マリンズ『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』（トランスビュー）

佐藤敏夫『植村正久』（新教出版社）
大内三郎『植村正久　生涯と思想』（日本キリスト教団出版局）
『植村正久論考』（新教出版社）
武田清子『植村正久　その思想史的考察』（教文館）
雨宮栄一『若き植村正久』『戦う植村正久』『牧師植村正久』（新教出版社）
崔　炳一『近代日本の改革派キリスト教―植村正久と高倉徳太郎の思想史的研究―』
（花書院）
森岡清美『明治キリスト教会形成の社会史』（東京大学出版会）
森本あんり『アジア神学講義』（創文社）
徐正敏『日韓キリスト教関係史研究』（日本キリスト教団出版局）
『韓国キリスト教史概論――その出会いと葛藤』（かんよう出版、2012 年）
柳父圀近『日本的プロテスタンティズムの政治思想――無教会における国家と宗教』
（新教出版社、2016 年）
芦名定道『近代日本とキリスト教思想の可能性』（三恵社、2016 年）
柴田真希都『明治知識人としての内村鑑三――その批判精神と普遍主義の展開』
（みすず書房、2016 年）
近藤勝彦 『デモクラシーの神学思想　自由の伝統とプロテスタンティズム』（教文館）
（植村、内村、海老名、吉野作造、南原繁）
『キリスト教弁証学』（教文館、2016 年）
第四部「新しい日本の形成の文脈におけるキリスト教の弁証」
赤江達也『「紙上の教会」と日本近代――無教会キリスト教の歴史社会学』
（岩波書店、2013 年）
『矢内原忠雄――戦争と知識人の使命』（岩波新書、2017 年）

戦中・戦後の日本のキリスト教と愛国心

＜研究会の目的と内容＞

冷戦後急速なグローバリズムで弱体化した市民社会は、各地で強力なリーダーシップを求めるポピュリズムを生んだ。だがこれは民主化を意味しない。国権と排外的なナショナリズムが強められてきたからだ。その結果、「安全」という名目のもとに「自由」や「平等」といった近代民主主義の理想は退けられ、「立憲主義」や「人権」といったこれまで自明であった概念が脇に追いやられるようになってしまった。本邦も例外ではない。現政権とつながりの深い日本会議の反動的な動きからも明らかであろう。このような状況において日本のキリスト教会は政治についてどのように考え、応答していくべきなのだろうか。

政治との関係において、これまでの日本の教会にはふたつの異なる方向性があっ

た。ひとつは、抗議やデモを通して直接的な行動をするものである。もうひとつは、福音を救霊に限定し、政治行動についてはそれぞれの裁量に任せるというものである。現代において両者の立場は対立しており、議論不可能な隘路に迷い込んだといってもよい。しかしながら、そのような対立は、神学的な議論を深めるよい機会である。まさにそこに政治的な対立があるからこそ、その背後にある神学的な原理を浮き彫りにし、その正誤を明らかにする必要が生まれるからだ。

本研究会は、近代政治とキリスト教の関係を歴史・神学的に検証し、現代的な問題への提言を目的とする。そうするにあたって三つの軸が考えられるだろう。ひとつは、宗教改革以降のプロテスタント教会の政治との関わり方である。宗教改革の伝統は近代民主主義の理念とかならずしも調和的であったわけではない。自由、平等、寛容の精神は、19 世紀以降の自由主義的なキリスト教が重んじてきたものではあれ、反リベラルな立場をとる諸教会は神学的な考察を深めてこなかった。とりわけアメリカのファンダメンタリズムや戦後の福音主義の流れをくむ諸教会は、政治から退き、二元論的な福音理解を提唱してきた。そうした教会のなかに、排外主義や極端なナショナリズムが広まりつつある。二つ目は、教会の政治参加に積極的な立場である。なるほど主流派やカトリック教会は、戦後日本における教会の政治参加を牽引してきたといってよいだろう。だがそれは現代においてひとつの運動と化し、神学的な批判や新しい世代に説得力をもつ神学的な主張を提示できていない。三つ目は、キリスト教世界観や神の国といった東京基督教大学が重んじてきた概念群である。これら三つの軸を近年の聖書学や歴史研究の成果をふまえてもう一度神学的に検討し、現代日本の状況に適した神学を紡ぎ出していかなければならない。

本研究会では 2 ヶ月に一度程度の定例会を開き、聖書神学、歴史神学、組織神学、政治神学、宣教学、実践神学の異なる視点から本対象について議論を深めていく。研究所所員の発表に加えて、学外の研究者との交流も促進する。そのような議論を重ねることで、福音派にかぎらず、現代日本のキリスト教会が今後どのように政治を考え、参加し、批判すべきかの指針を提供していきたい。

戦中・戦後の日本のキリスト教と愛国心

＜内容＞

1　問題
2　近代日本とキリスト教――戦前・戦中・戦後
3　キリスト教と愛国心・ナショナリズム
4　展望

１　問題

1．現在、キリスト教にとって、なぜ愛国心は問題なのか。

・「「愛国の作法」には、既存の「愛国」の反復形成ではなく、戦略的な柔軟性をもった新たな「愛国」のあり方を探る意図がこめられています。大切なことは、国を愛することや愛国心を、夜郎自大的な一部の「右翼」的な人々の専売特許にしておかないことです。もっとしなやかに、そしてしたたかに国を愛することや愛国心について語り、議論することが必要なのです。」（姜、12）

「第一章　なぜいま「愛国なのか」」、「グローバル化という逆説」「福祉国家から「ノイローゼ国家」へ」「断片化する社会」「なぜ首相が靖国参拝をするのか」「共同体の外に広

がる暗い密林」「「新・国体」論が若者に受ける理由」「安心への脅威が求心力に」「高まる愛国心の内圧」（姜）

２．「近代日本とキリスト教」に関して。日本において民主主義はいかにして根付くことができるか。

・「日本の近代化の新たな推進に際し、憲法的諸価値は世界観的に中立ではあるが、それらの精神的起源を問えば、歴史的に言って、プロテスタント・キリスト教以外の源泉を考えることは困難である。プロテスタント教会は、人格と自由、人権やデモクラシーといった宗教的拘束から自由な憲法的諸価値をその起源的な宗教的根底から理解し、深みからの実現に協働する。それはもとよりキリスト教会の第一の使命ではないとしてもである。」（近藤、447）

「以後、キリスト教、特にプロテスタント・キリスト教は、困難な闘いの中に陥り、ごく限られた伝道の空間を保持し、今日に至っている。歴史的に回顧すると、戦時における日本基督教団の挫折とその未処理問題、そして一九六〇年代末から四〇年にわたる日本基督教団の混乱とその結着の無力が問われている。」（近藤、446）

近藤勝彦『伝道の神学―― 21 世紀キリスト教伝道のために』（教文館、2002 年）
第一部第 3 章「「教団史」における伝道――その喪失と回復」
『キリスト教の世界政策――』現代文明におけるキリスト教の責任と役割（教文館、2007 年）

・ティリッヒ『キリスト教と諸世界宗教との出会い』（1962 年）

「日本は、民主主義を戦勝者の手から感謝して受け取った。しかし、民主主義は、それにとって好都合な社会的諸前提を必要とするが、それと同じ程度に、精神的な根づきを必要とする。そして、民主主義のさまざまな精神的な根が、日本には欠けている」、「神道も仏教も」（著作集４、白水社、87）。

「傍聴者は自問する。「このような事情でのもとで、日本のデモクラシーは可能なのだろうか。一つの政治体制を模倣することが精神的基盤の欠如を補うことができるのだろうか」と。」（ティリッヒ、123）

３．近代現代、戦後、市民社会など、問い自体が問題である。

「批評家の加藤典洋」「一九九七年の『敗戦後論』」「加藤のいう「革新派」は、共産党も南原などを無視して成立している観念なのである。」（小熊、15）

「そもそも「戦後民主主義」という呼称もまた、一九六〇年代前後から現われたものであった。「第一の戦後」に生きていた人びとは、同時代の多様な運動や思想を、総称する言葉をもっていなかった。「戦後民主主義」とは、「第二の戦後」から「第一の戦後」を表象するために発明された言葉である。そのような表象が、しばしば実情とかけ離れた単純化されたものになりやすいことはいうまでもない。」（小熊、16）

「ここで問題としているのは、以下のようなことである。われわれが使用している言語は、歴史的な経緯のなかで生みだされ、変遷してきたものである。そのなかには、「市民」「民族」「国家」「近代」といった、ナショナリズムや「公」を語る基本的な言葉が含まれている」、「「戦後」の再検討は、こうした言葉の使用法が、いかなる変遷を経てきたかの再検討でもある。それは同時に、現代に生きるわれわれが、われわれを拘束している言語体系をみつめなおし、ものごとを論ずる回路を開くための基礎作業にほかならない。」（小熊、17）

４．日本においてキリスト教を問題にする意義。日本社会にとって、そしてキリスト教自体にとって。

近代日本論で欠落してきたのは、「キリスト教」という視点。

「文化を通過していく間接的な道」「個人的な対話」。「日本のように、ほとんどあらゆる階級がかなり高い文化的段階にある国では、伝道の効果はきわまて僅かである」。「むしろ、キリスト教的ヒューマニズム」。「すべてのアジアの宗教に置いて決定的なのは、むしろキリスト教の間接的で文化的な影響であって、キリスト教の伝道活動ではないからである。」（ティリッヒ、112）

・井上章一『キリスト教と日本人』講談社現代新書、2001 年。

５．まず、近現代日本の歴史的文脈における展開を確認する。明治の近代日本の形成期に遡る必要がある。明治から現代に至る流れを辿る際に、随時、無教会キリスト教の系譜　に注目する。

６．その上で、キリスト教と愛国心・ナショナリズムとの関係へ。
そもそも愛とは、国・国家とは。

７．最期に、今後の課題を展望する。

２　近代日本とキリスト教――戦前・戦中・戦後

８．二つの地平。「近代キリスト教の地平」と「近代のアジア・日本の地平」。

・「日本のキリスト教研究」「アジアのキリスト教研究」と地平モデル

「「アジアのキリスト教」の解釈学的構造に注目した研究モデル」

「事象の意味理解」が「先行理解」を前提としていること、「この先行理解は、事象の意味に関わる問いと答えを規定する「伝統」に帰属しつつ、歴史的・動的に展開してゆく」（芦名、26）、「「伝統」を「地平」（Horizont）と名付け、過去の地平との対話（事象についての問いと答え）によって新たにそのつどの「地平」が形成されるプロセスを「地平融合（Horizontberschmelzung）」と呼ぶ」、「「アジアのキリスト教」という事象が、なによりも先ず一つの歴史的事象であって、その理解には、解釈学的アプローチを必要とする。」（芦名、27）

・「日本のキリスト教」というわりには、日本、特に日本宗教文化への考察は表面的なものにとどまってはいないか。

９．そもそも日本とは？　近代日本＝「戦前・戦中・戦後」とはいかなる時代だったのか？
生存を賭けた選択、競合するベクトル。

・戦前から戦中：国民国家へ、

二つの近代（近代の二つの形）：西欧的なリベラリズムか絶対王政か。

大澤真幸『ナショナリズムの由来』講談社、2007 年。

３０年戦争とウェストファリア条約。「第一に、絶対王政の段階にネーションの「種」が蒔かれる。次いで、十八世紀から十九世紀にかけて、ヨーロッパで、ネーションが本格的に実現する。前者をナショナリズムとネーションの「先駆的な実現」、後者を「本格的な実現」と、呼んでおくことにしよう。」（大澤、106）

明治のキリスト者の国家論はこの二重性に規定されている。

ナショナリズム・国民国家：民族主義と国家主義の二重性。

塩川伸明『民族とネイション――ナショナリズムという難問』
岩波新書、2008 年。

・戦後から現代：グローバル化の中で

国民国家を内包した（相対化した）広域的秩序形成へ。まず政治的に始まり、そして経済的に実現される＝政治に対する経済の優位。

芦名定道「現代神学の冒険――新しい海図を求めて」「第９回　インターリュード（２）――現代神学の海図の枠組み」（『福音と世界』2017.6、新教出

版社）

10.「近代」近代以降の国家・民族、キリスト教
・国家：国民国家・個人主義の時代
民族主義（国民国家、国家と民族）、愛国（教育と軍隊）は、近代的な意味で理解される必要がある。
・国教会と自由教会：国教会も近代的な意味で。

11. キリスト教なき近代の問題性
「「キリスト教なき日本」の問題は、やがて昭和一二年以降、内面をも支配する一種疑似宗教的な熱狂的超国家主義（Ultranationalism）に顕在化した。しかしその傾向は、それ以前にもまたそれ以後にも、日本の国家、社会、文化に潜伏する底流としてあり続けたものであり、現在も国家や社会の底流にあり続けている。二一世紀に至り、今日のグローバル化の中で、「新しい日本」の可能性が問われている」（近藤、311）、「新しい日本の形成に対するキリスト教からの提案を提示」（近藤、312）
「近代日本における「キリスト教の意義」は、もちろん日本に福音を伝え、神の救済の働きに仕え、キリストの体である教会を築くことであるが、それは同時に日本における市民社会の形成に結果的に資するという面があったことは明らかである。」（近藤、326）

12. 近代の問題であり、近代日本キリスト教の問題でもある。
個人主義的な近代、これはキリスト教にも、日本のキリスト教にも影響している。
・「十九世紀ヨーロッパは、たといその底にあるいは一部に理想主義的要素がなお残存していたとはいえ、おしなべて実証主義を転機として、ひいてマルクス主義の発展において、その頂点に達したものというべく、それは近代精神がその往きつくところまで往きつくし、論理的に突きつめられた必然の結果と見ることができる。かような近代ヨーロッパ精神に共通の特徴は、何よりもその現実的な人間性の理念と、かかる人間個人中心の原理とにおいて捉えられ得るであろう。」（南原繁『国家と宗教――ヨーロッパの精神史の研究』岩波文庫、245）
「社会主義が自由主義に反対して新たな「社会」共同体の概念を強調して興ったにもかかわらず、原理的には個人主義を超克し得なかったことは意義深い。」（南原、249）
→　全体主義へ
・現代は政治思想の時代。政治哲学の課題は、道徳（個人）に還元されない「政治的なもの」の復興。しかし、ムフ（『政治的なるものの再興』日本経済評論社）によれば、ロールズなお、個人主義を克服していない。　→　リベラリズムと共同体主義
現代キリスト教思想においても、モルトマンにもかかわらず、政治神学はいまだ課題にとどまっている。
芦名定道「南原繁の政治哲学とその射程」（京都大学文学研究科・日本哲学史専修『日本哲学史研究』、2017 年 3 月、pp.33-58。）

３　キリスト教と愛国心・ナショナリズム

13.「二つの地平」→「伝統と状況」
状況への対応あるいは弁証としての日本的キリスト教
「当時におけるそうした顕著な反応の一つに《日本的キリスト教》の提唱があった。それは、プロテスタント各教派の中で、あるいはその周辺にある独立の信徒や神学者が個人的レベルで、日本の伝統的な精神や宗教と結びつけることによって特有のキリスト教弁証論を試みたものである。その主観的意図は何であったにせよ、結果的には国策協力に通じていたし、ひいては国体思想への直接的・間接的な《屈服》、ついには、それとの《習合》

と異ならない様相を呈するものまで出現した。もっとも、《日本的キリスト教》という言葉は、よく知られているように、つとに、内村鑑三によって用いられ、それ以後、無教会主義の人びとによっても継承されてきた用語である。」（宮田、377）

14．無教会キリスト教の場合。
「内村鑑三」「二つの J」「もう一つの問題として「我は日本のため」という際の「日本」概念に曖昧さがつきまとっているという問題がある。ここでの日本とは何かが必ずしもはっきりしない」。「理想の日本」と「現実の日本」。「「国家」「民族」「文化」「社会」の区別が明瞭ではない。」（近藤、354）
「内村にあって「愛国心」と「ナショナリズム」の区別は不明確である。」（近藤、355）
「内村の日本的宗教心の異常なほどに高い評価の中には、彼の思想家としての単純性や一種の偏狭さが現れているのではないかと疑われる。」（近藤、358）
「この主観的信仰の客観的信仰との引き離しは、信仰概念が客観的な出来事や信仰内容から離れて、主観主義的、情緒主義的信仰概念に堕しているということにもなるであろう。」（近藤、359）、「主体的信仰としての「日本人の宗教心」が、信仰内容としての「純福音」と両立させられ、相互補足の関係に立ち、「日本的基督教」が主張された。」（近藤、360）
cf.　柴田真希都『明治知識人としての内村鑑三――その批判精神と普遍主義の展開』みすず書房、2016 年。
ナショナリズム（「政治的ないしイデオロギー的な概念」）と愛国心（「文化的な感情的なもの」）の区別に立って、内村に「愛国心」を読み取る。
このナショナリズム理解は適切か？　イデオロギー概念も。

15．「「愛国心」は「愛郷心」の「自然な」延長にすぎないのでしょうか。そうではありません。」（姜、130）
「近代の国民国家は、まさしくそのような「パトリア」の連続的な拡大（故郷の村・町・地方から故郷の国へ）を切断するところではじめて成立したのです。」（姜、147）
「「愛郷（心）」と「愛国（心）」は両義的な関係にある」（姜、155）

16．芦名定道「日本的霊性とキリスト教」（明治聖徳記念学会『明治聖徳記念学会紀要』復刊第 44 号、2007 年 11 月、pp.228-239.）。
芦名定道「日本的霊性とキリスト教――キリスト教土着化論との関連で」（北陸宗教文化学会『北陸宗教文化』第 24 号、2011 年 3 月　pp.1-18.）。

17．植村正久
「吾人は国家のため、霊性の救拯のために、神霊主義の大旗を掲げ、全力を尽くしてこの強敵（唯物的精神、引用者補足）を挫かざるべからず。キリスト教徒は日本帝国のためにこの国害を取り除く重任を負える」（植村正久「日本伝道論」、明治　27 年、88 頁）、「日本のキリスト教徒は非常なる熱情、壮烈なる志望とをもって、神に祷告し、今回の事変（日清戦争、引用者補足）が日本帝国の光栄を増し、将来に大関係ある履歴を作り、大いに世界の文明に与力する端を開くに至らんことを求めざるべからず。」（植村正久「世界の日本」、明治 27 年、95 頁）

18．矢内原忠雄『国家の理想――戦時評論集――』（岩波書店、1982 年）所収の 1930 年代の諸論考。
・「日本的基督教といふのは、西洋かぶれのしない基督教といふこと」であり、思想的経済的に西欧キリスト教会から自立した日本人による日本伝道を行う教会、つまり、矢内原の師である内村鑑三の目指したキリスト教に他ならない（矢内原、116）。
・日本的キリスト教は、「日本人の心によつて基督教を把握するといふ事」であり、（同

書、437)、矢内原は次のように明言して憚らない。「基督教は日本精神の美点を発揮するものであると共に、其の足らざるを補ひ、及ばざるを純化すべきもの」であって、「基督教は我が国体に反しないといふことが、基督教会の繰返しての主張であり、又其の実行でもある。私もさう信じる一人である」(同書、118)、と。したがって、キリスト教は単なる外来宗教ではなく、日本人の心情に根差したものとなるべきであり、またそうなることは可能なのである。

・「日本的基督教の使命は、第一には、日本人の心によつて基督教の深い真理を、深い深い基督教の真理を新に把握する、新なる角度から把握する、之が第一であります。第二には、斯くして把握したる基督教によつて日本の国を高める事である。さうして日本の国によつて世界を高める事であります。」(同書、438)

19. 日本に対する滅亡預言。 足尾銅山事件に現れた富国強兵に奔走する日本。

「亡ぶべき日本あり、亡ぶべからざる日本あり、貴族、政治家、軍隊の代表する日本、これ早晩必ず亡ぶべき日本にして、余輩は常に予言して止まざる日本国の滅亡とはこの種の日本を指して云ふなり。」(内村鑑三『世界のなかの日本』(内村鑑三選集４)、岩波書店、1990年。124 頁)

「日本国が如何に危険の地位にあるかは鉱毒事件を見て最も良く察することが出来るのであります。滅亡です、滅亡です、日本国の滅亡は決して空想ではありません」(132-133)。

滅亡預言という仕方で遂行される、日本キリスト教の愛国的使命。

20. キリスト教は愛国的たり得るか。

・「キリスト教とナショナリズム」は聖書テキストに遡った検討が必要になる。

・現代聖書学は、近代的な個人主義的聖書解釈に変更を迫っている。

・イエス・パウロと国家。

M・J・ボーグ『イエス・ルネサンス――現代アメリカのイエス研究』教文館、1997 年。

David G. Horrell, *An Introduction to the Study of Paul*. Third Edition, Bloomsbury, 2015.

４　展望

21. 課題:「批判と形成」

22. 現代日本の状況に対して。

批判という課題。しかし、「批判」すればよいという自己満足的批判ではなく、現実にかみ合う批判であること。

23. 地域・市民社会から国家・民族、そして国際・グローバル化までの現実を視野に入れた神学の理論展開、そのために研究所の役割。

批判から形成へ、あるいは形成を前提とした批判。

「ナッショナルな目標を達成するためには、ナショナルな枠組みを超えなければならないのです。」(姜、198)

＜参考文献＞

１．姜尚中『愛国の作法』朝日新書、2006 年。
２．近藤勝彦『キリスト教弁証学』教文館、2016 年。
３．小熊英二『〈民主〉と〈愛国〉――戦後日本のナショナリズムと公共性』新曜社、2002 年。

４．芦名定道『近代日本とキリスト教思想の可能性――二つの地平が交わるところにて』
三恵社、2016 年。
５．南原繁『国家と宗教――ヨーロッパの精神史の研究』岩波書店（現在、岩波文庫）、
1942 年。
６．宮田光雄『国家と宗教――ローマ書十三章解釈史=影響史の研究』岩波書店、2010 年。
第Ⅱ部　近代日本思想史におけるローマ書十三章
――明治期プロテスタンティズムから太平洋戦争の時代まで
７．柳父圀近『日本的プロテスタンティズムの政治思想――無教会における国家と宗教』
新教出版社、2016 年。
赤江達也『矢内原忠雄――戦争と知識人の使命』岩波書店、2017 年。
８．芦名定道・土井健司・辻学『改訂新版　現代を生きるキリスト教――もうひとつの道
から』教文館、2004 年。
「第二部　キリスト教思想の現在」各章の「第３講　思想」
男と女、家族、富・貧・欲望、多元化・グローバル化、民族主義